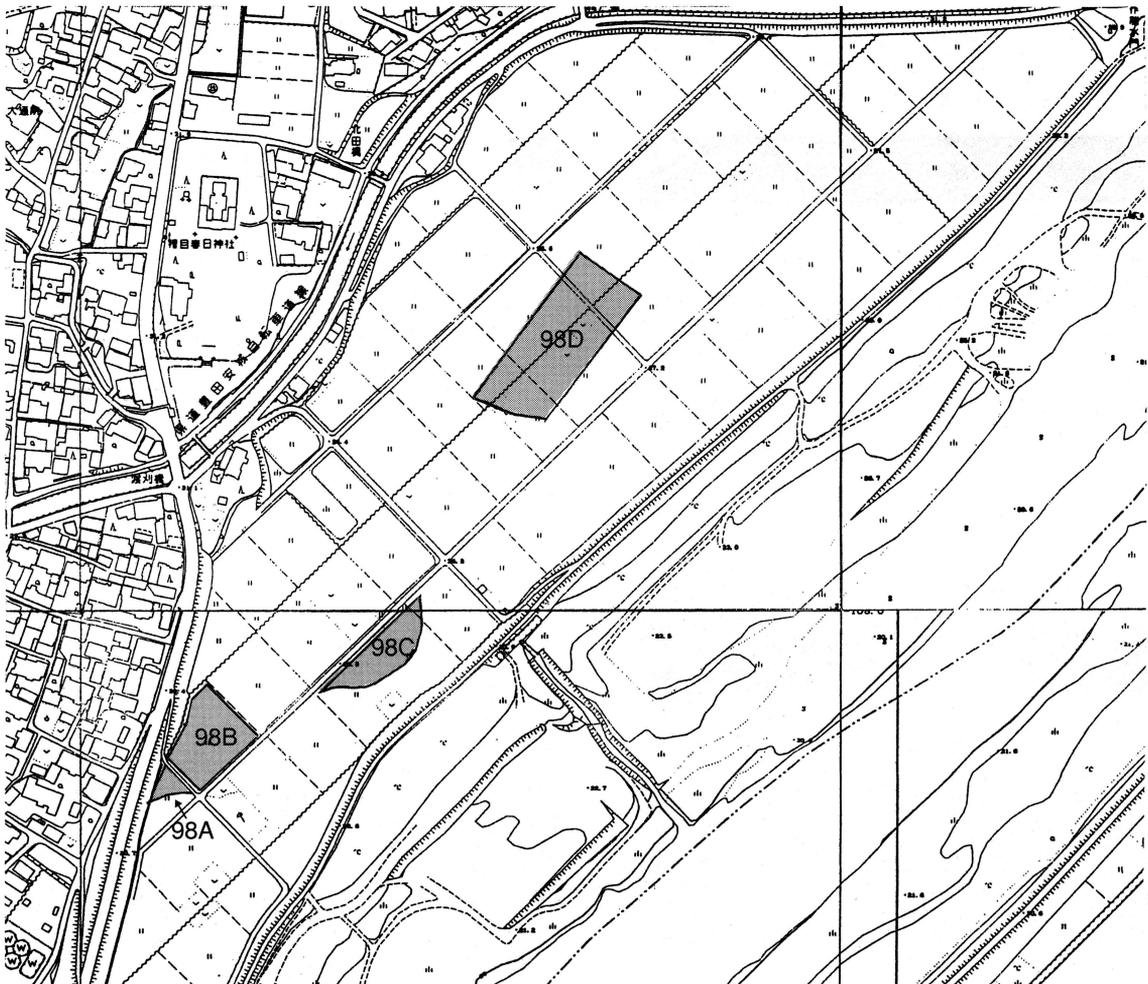


みずいり  
水入遺跡

**調査の経過** 水入遺跡は、豊田市渡刈町水入地区（字下槽目及び大屋敷）に所在し、碧海台地端の明治用水堤防から矢作川中流域右岸堤防間の低地に位置する。なお、水入地区（15.3ヘクタール）は昭和34年に区画整理をうけている。発掘調査は第二東海自動車道の豊田東インターチェンジ建設予定地内の事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成10年7月から8月にかけて範囲確認調査を、平成10年9月から平成11年3月にかけて本調査を実施した。本年度の本調査面積は10,000㎡で、A～Dの4つの調査区に分けて調査を行った。

**調査の概要** 調査の結果、水入遺跡は古墳時代中期、奈良・平安時代前期、鎌倉時代、戦国時代、そして江戸時代の5期に大きく区分して考えることができる。近世以降では水田遺構を中心とし、中世以前では洪積段丘面（笹川面）に掘り込まれた住居跡群や土坑墓群に代表される遺跡である。また、矢作川により近い調査区（C区）では堤状遺構が確認されている。

（木川正夫）



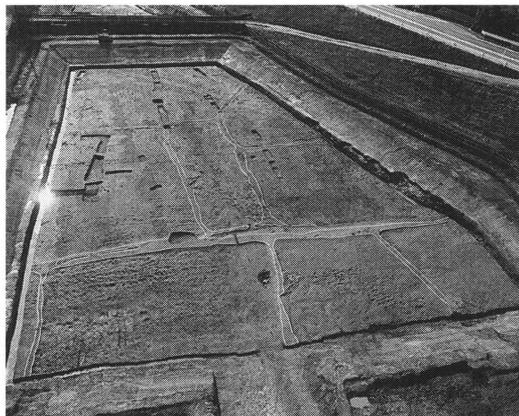
第1図 調査区配置図（1：5,000）

**A・B・C区** A・B・C区上面では、A期、B期の2時期の水田跡が検出された。A期水田は中世以降、B期水田は江戸時代のもものと推定される。畦畔は、高さ約5～15cm、幅約40～90cmで、畦畔による区画から割り出した一筆あたりの推定平均面積は、A期水田が約100㎡、B期水田が約150㎡であり、B区においては、A期水田面に平均約21cmの明瞭な足跡群が確認された。ちなみに、A・B・C区ともに、B期水田面の足跡群は確認されていない。また、C区においては、戦国時代のもものと推定される堤状遺構の最先端部も検出された。堤状遺構は、中世に構築されたとされる築堤土を核として、戦国時代に円礫を積み上げて再構築し、さらに、江戸時代初頭にその廻りに土盛しており、最低2回の拡築が確認できた。ただし、洪水や削平など、後世の破壊が著しく、その全貌をとらえることは困難であった。堤状遺構以後の遺構としては、江戸時代後半のもものと推定される4条の溝と18基の土坑が検出され、いずれも耕作に関連するものと思われる。堤状遺構は、平成11年度調査区内へ延びていくと考えられ、今後の調査により全体像が明らかにされるであろう。

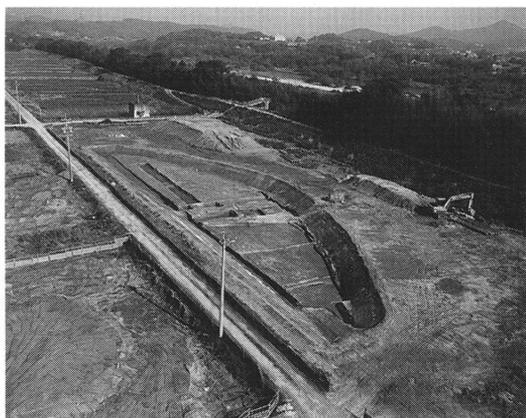
(鈴木達也)



A区全景



B区全景

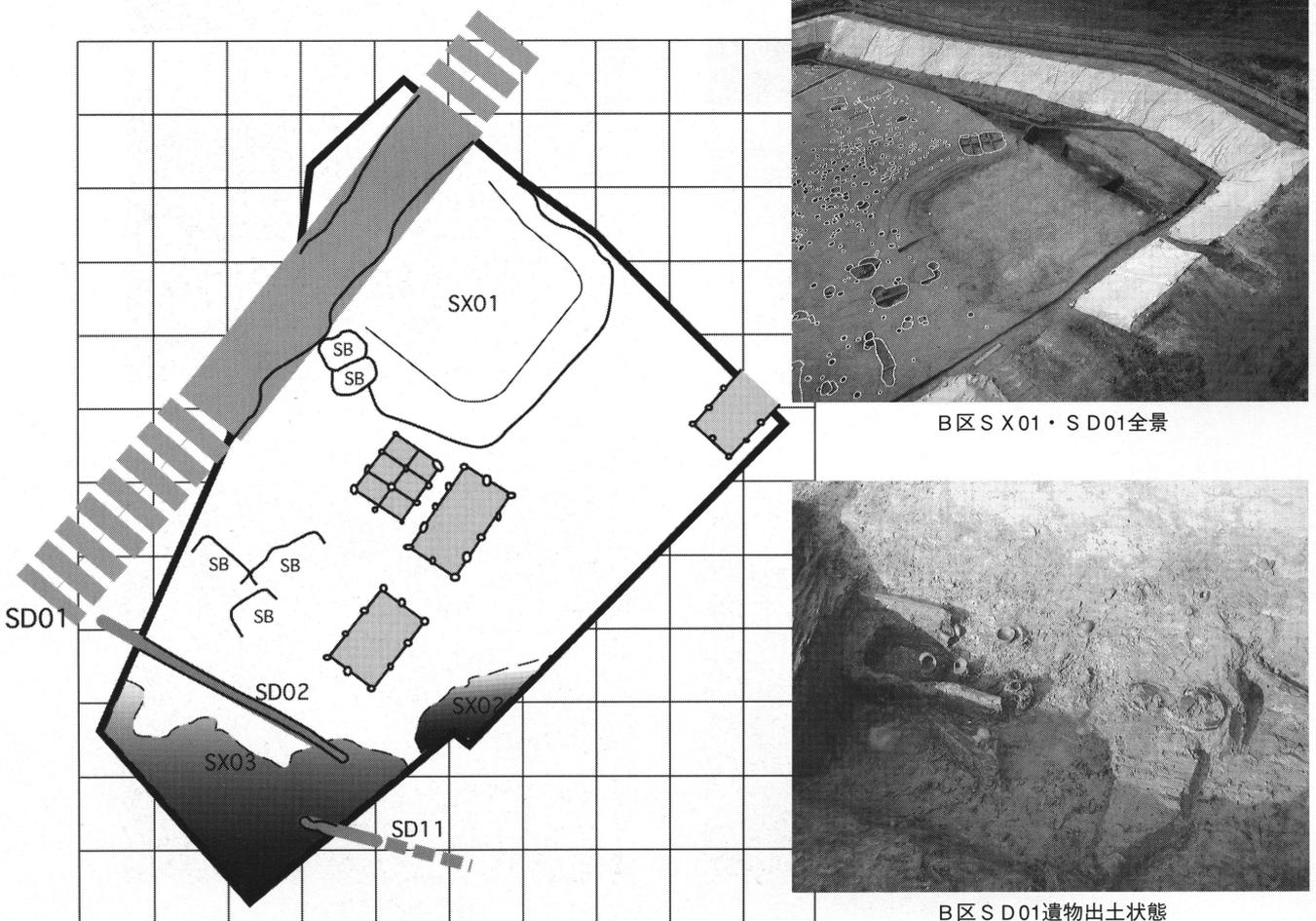


C区全景



C区堤状遺構

**B区下面** B区下面では奈良・平安時代後期を中心とする集落が展開する。この集落は矢作川の低位段丘である籠川面に立地している。今回の調査区は水入遺跡に展開する集落の南端に相当すると思われ、集落の南を限る、内外の溝を異なる地点で途切れさせ鍵状の出入り口を設けた2条の溝（SD02,11）が掘削されていた。このことは、2条の溝より南側は遺構、遺物ともに稀薄となることから推定できる。また本調査区の北西部では、集落の北西を限る大溝（SD01）が検出された。この大溝は幅3m、深さ2.5mをはかり、断面は箱薬研状を呈する。また、この溝は湧水層を掘り込んでおり、開口時にはかなりの水量があったことが推測される。掘削以降、幾度かの掘りなおしが行われており、出土遺物から掘削時期は5世紀後半、埋没時期は13世紀前半と考えられる。この大溝の性格は規模などから単なる屋敷地の区画溝とは考えにくく、水入遺跡に展開する集落全体を規制するような性格を想定することができる。加えてC区下面の遺構との関連から水運に関する施設の一部であることも考えられるが、詳細は今後の発掘調査の結果をまたなければならない。そして、これらの溝で区画される空間に掘立柱建物4棟（うち1棟は総柱建物＝倉庫？）、土坑・柱穴群が展開する。また、大溝に付随する施設としてSX01がある。この遺構は段丘面を掘削し、人為的に平坦面を作り出している。この平坦面に遺構はまったく検出されておらず、広場としての利用がなされていた可能性が高い。（川井啓介）



第2図 B区下面遺構配置図（1：500）

**C区下面** 沖積層下の低位段丘面は矢作川に向かって緩やかに下っていき、その上面で近世初頭までの遺構が確認される。そして本調査区では、往時の矢作川に面していたとみられる崖面が確認された。

崖面はほぼ直線的であり、北東から南西に向かって延びている。98B区ではこのような崖面は確認されていないが、調査区南端を最下点として傾斜しており、おそらく崖面は98B区南端をかすめるようにして天神前遺跡方面に続いていると推定される。現在明らかになっているだけで直線部分は約80mをはかる。崖面から段丘側へ約5mまでの範囲は人頭大以下の円礫が露出した状態にあり、河原のような景観をつくっている。このような景観は、崖下の埋土の状況や礫間の出土遺物からみて中世まで続いていたと思われる。また、崖面に対する積極的な造作の痕跡は確認されなかった。

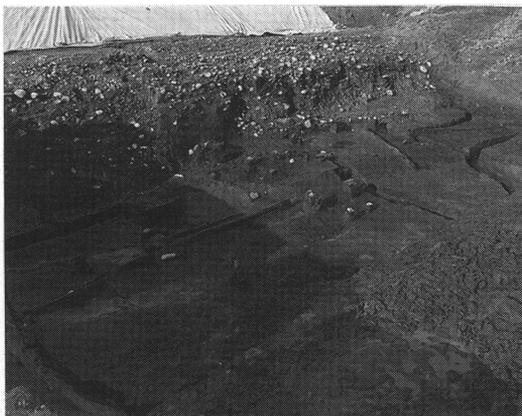
崖下の段丘面高より下の埋土は、奈良時代以降の遺物が含まれる層位は砂主体の水性堆積であるが、その下の古墳時代中期の土器がまとまって出土する層位はシルト主体で植物遺体・炭化物を多く含んでいる。当該期の土器は調査区の数カ所で集中する傾向がうかがわれ、小型壺・高杯が多いのが注目される。祭祀の可能性もさることながら、古墳時代の集落の存在を示唆するものでもある。(永井邦仁)



C区全景（北東から）



作業風景（東から）



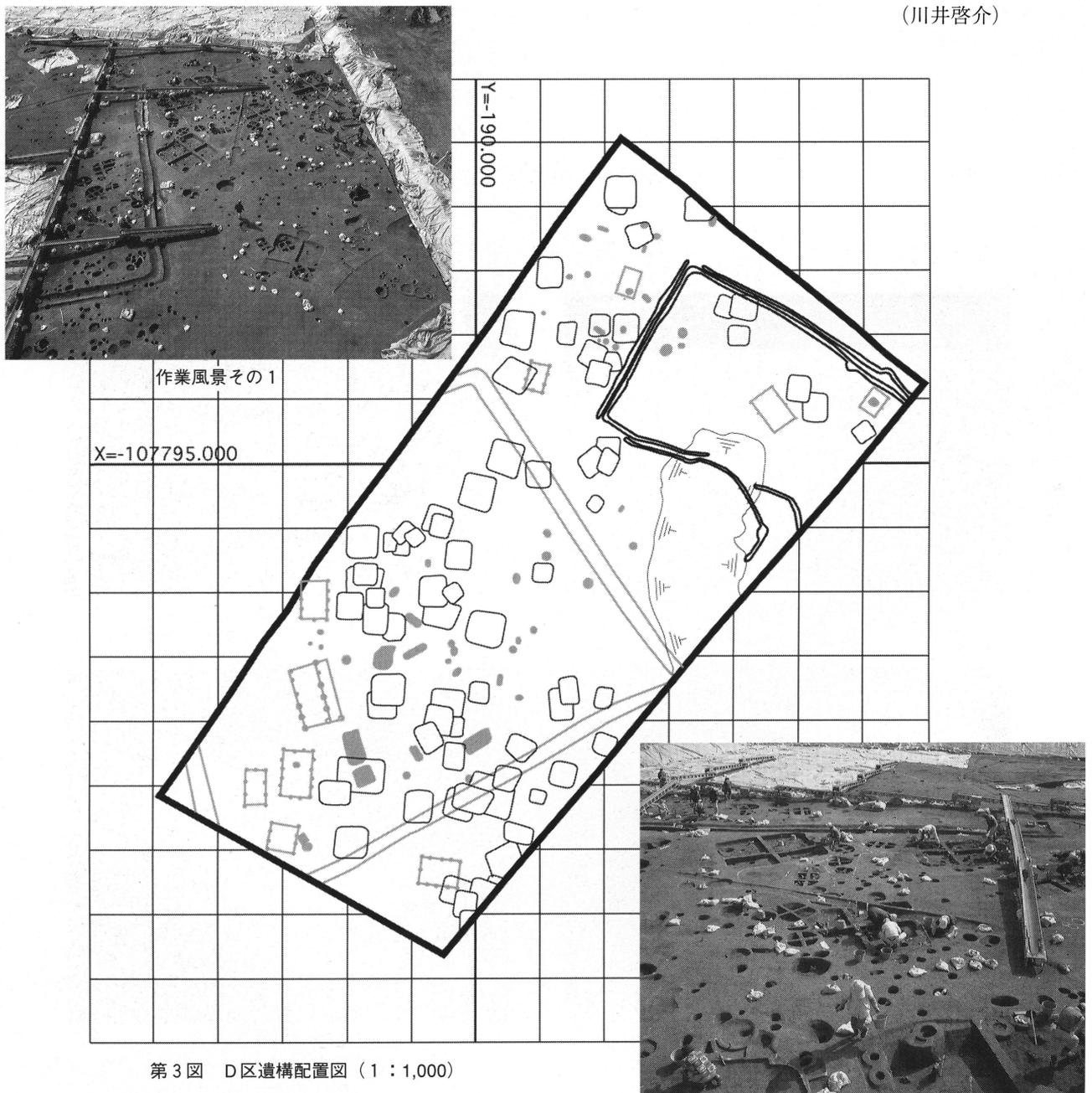
崖面検出状況（南東から）



古墳時代遺物出土状況

D区 D区で検出された遺構は奈良・平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代の3時期に区分することができる。奈良・平安時代後期の遺構としては、調査区南東部の窪地状の落ち込みを取り巻くように竪穴住居が重複しながら展開している。竪穴住居の規模は一辺3～6m程度で、隅丸方形のプランを呈し、西・北壁にカマドが残存しているものも見られる。これ以外に、掘立柱建物や土坑等を確認した。鎌倉時代の遺構としては、方形区画を構成する溝とその内外に展開する掘立柱建物、土坑墓等を検出した。区画溝は幅2m、深さ1mを測り、断面は箱型を呈する。この方形区画は東西70m、南北55mの規模を有するが、区画内部には小区画を構成する溝や井戸などが検出されておらず、また、周囲には土坑墓群が展開することから、単純に居住域とは断定しがたく、特殊な空間であることも考えられる。江戸時代の遺構としては、調査区北東部において、溝数条、土坑等を検出した。

(川井啓介)



第3図 D区遺構配置図(1:1,000)

作業風景その2

**展望と課題** 今年度の調査で、水入地区には低位段丘面が存在し、その上に古墳時代から中世後半までの集落が展開していることが判明した。気づいた点を挙げまとめにかえたい。

古墳時代中期における大溝の開削は、近隣の郷上遺跡でも確認されている。付近一帯で当該期に大規模な開発がおこなわれたことを示すものである。また、中位段丘上に展開する神明遺跡においても古墳時代中期が集落の最盛期とされており、ひとつの画期としてとらえられる。水入遺跡では古墳時代の居住域は未確認であるが、中央部の小谷より南側の一帯が想定される。来年度の調査に期待されるところである。

遺跡の立地が矢作川に接していることからして、当然ながら河川交通に関わる位置づけが考えられる。現在のところ98B区の大溝とSX01が運河と船着き場の機能をもっていたと推定される程度である。その点で遺跡中央の小谷は重要になってこよう。

中世に限ると、土坑墓群と方形区画溝との関わりが注目される。土坑墓群は数基程度のものでなく、ある程度まとまった数になるとみられる。そのような「墓域」の形成に区画溝とその内側がどのように関わっていたのだろうか。また、98C区から北西に延びる戦国期構築の堤状遺構はどのような目的があったのだろうか。

「埋もれたムラ」の解明は始まったばかりである。

(永井邦仁)



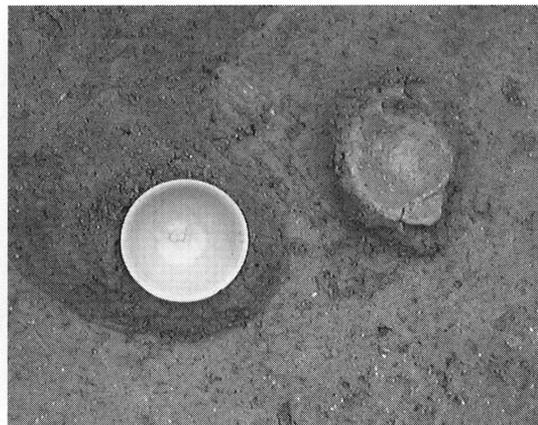
D区作業風景



D区土坑墓その1



作業風景その3



D区土坑墓その2